WASON
HQ
1104
J74+

THE WOMAN'S MAGAZINE.

明治二十年八月二十七日刊行

毎土曜日發兌
一冊正價五錢
府内無郵送税

女學雜誌

第七十三號

東京 女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 73. August 27th, 1887.

第七十三號

EDITORIAL:—On Fine Art: No. I—Beauty in Nature.

LEADING ARTICLES:—Woman and Hygiene by Dr. K. Takagi. (Concluded); Alcoholic Poison by Mr. S. Tsuda.

MISCELLANIES:—Three Princesses of "King Lear; A Poem in Memoriam of Mrs. Kimura; Introduction to Mrs. Kimura's Biography by Prof. M. Toyama; A Word on Bathing.

CRITICAL NOTICES:—"Lecture on Tsurezuregusa" (Tsurezuregusa Kōgi) by H. Suzuki.

BIOGRAPHIES:—Josho's Mather; Grotius and the Book Case (Concluded).

NOVELS:—"The Fragrant Rose:" No. VI.

CORRESPONDENCES.

GENERAL NEWS.

ADVERTISEMENTS.

●社説 美術論(第壹)山水の好風景

●論説 女子と衛生第七(高木兼寛君述)○酒の害(津田仙君述)

●叢話 三人の姫(第一)○八月十八日木村鐙子の一周忌に當りてよめる吊歌○木村鐙子小傳の序(外山正一君)○入湯及び皮膚を洗ふ事

●批評 つれ〴〵草講義

●佳傳 徐庶が母○グローシアス夫人夫を救ひし事

●小説 薔薇の香第七(月のやしのぶ)

●寄書 愛の歌(担庵主人)○亡母の忌日花月に斷腸の思あり(櫻田いう)○文苑(鈴木弘恭君選)○良人を思(渡邊幸子)

●新報 十六件 ●廣告

○女流小言漫錄 (其二)

○女の第一に婦德を損んずる事は暴らしき嫉妬の擧動なり夫婦の間のみならず朋友の間にもしば〳〵見聞する所にして古人も七去の内に之れを數へたり第二は知人の惡評あり隱言あり交際の談話中にも婦人は多く人の惡口を嘵べる者ありこは婦人の性質として細き事物に注意の行屆くもの故從て人の缺點に心を懸くるに至り此の癖に墜るものあり俗に云ふ岡目八目の類か是等の癖ある人は自らも他人の批評中にある事を知らずよく〳〵可謹事なり。

○女の世辭多きは聞き惡きものなり寒暖のあひさつより家内の健全を問ふ位ひの事は決して世辭にてはあらざるも無暗に衣服の美を賞し矢鱈に家の結搆を揚げ兒供の亂暴なるもおとなしいと云ひ迷惑なるも喜ばしき面色をなし苦しき事も樂しきように云ひなし遂には家内の雪隱その外娘の御白ひの付方猫の毛迄もほめそやして得意顏するありこれ何等の事ぞ輕薄にして愚なるを顯はすのみ。

○女いかるとき顏ふくらかし口を尖らして三時間も四時間も默り甚だしきは一日或ひは二三日間も口を開らかざる事あり腹立たしき事あれば怒るもよしながびくはあしゝ。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第七十三號

明治二十年八月廿七日

●社説

○美術論

（第壹）山水の好風景

われ此頃暫らく平常の業務を絶つて箱根の山中に暑を避け草生ひ茂り人跡甚だ稀れなる茅屋に閑居す、朝には早く起きて先づ外方を眺るに霧深く立ち籠りて湖の上數百歩の外を覆ふ茫として洋海を望むが如し靜かに出でゝ獨り谿川の傍に來れば音さら／＼と響きて人の相ひ語るが如し喜んで至れば細き流石を洗ふて其淸きこと布を引くが如し則ち徐ろに口すゝぎて顧みれば霧やゝ霽れて山を出し樹の枝水面を窺がひて影をつくろふ之れよりして日漸く中空に登り遂に西山の巓に沒するまで二六時中の景光一々變化す其の樣此邊に天地の界の內に於て極めて美ある一幅の畵を徐々として卷き去り卷き來るが如し斯て四面漸やく暗く山色いよ／＼黑し但だ湖上の小波星の光に照りて僅かに山水の趣を示めすに其風悉く白晝の觀に異り虫は暴れ切つたる庭前の叢の中に鳴き冷風時に枯れ枝の端を拂つて鳴るシン／＼たる夜の景色得て盡すべからずわれ獨り此の境遇に在つて沈思すれば今日の己れの甚だ昔日の我に異れるを覺ゆることあり。

蓋し平生世の事に關りてわが業務を行ふの時に當りては塵砂往々眼に懸り破れたる響醜くき聲偶ま耳に聞ゆ時としては榮枯の兆を見て涙を垂れ時としては盛衰の機に對して心を劖く身躰一び火け一たび冷え腦肉斷えず躍るが如き心地す之を今ま閑雅幽邃の地に遊ぶの時に比ぶれば其差ひ幾干ぞや。われ今ま或る時は水邊の樹木鬱蒼たる樹陰に虎の如く踞まりたる石の上に坐し帽を脫して臺となし書を開て讀む水面に躍る魚ポット笑ひ一二の木の葉サと落るの外われに近づくものなし玆に古の聖賢紙面に立現はれ吾れ後生と相ひ談論して眞理を隱微の間に拆つ、又或る時は水際につなぎたる古風の船を解いて獨り自ら艫を壓し中比に至つて其行くが儘に任す山高くして默し水平らかにして靜かなり書を置いて仰いで考ふれば天地悉く微妙の理を指し示すが如き樣あり。わが思ひ超然として世を脫し四面沈々として獨り宇宙に浮ぶ此際榮枯盛衰の機運はわれに於て關りなし反て眞如の理想を敎ゆ腦中洗ふが如し身躰飄々として羽化するの感あるなり。

依てつら／＼考ふるに此の二つの有樣は其の相ひ異ると恰も

黑白の如く殆んど氷と炭との相ひ容れざるが如き觀あり一を俗と云はんか則ち他は仙人の境遇志想なり一を有形卑近の事と云はん歟則ち他は是れ無形高尙の事と云ふべし人間此世に存せん限り右の二つは其も何れか人世に必要ありや脫俗仙骨の人甚だ優超の如くなれども利を爭ひ業を建るの活世界には甚だ緣遠くして無益なるが如し然れば凡そ有爲の人は多くは彼の有形卑近所云る俗世界に適するの境遇に安んじ尙ほ之に相應するの感覺を懷いて以て足れりとするとなれども此は眞に下等至極の見識にして苟くも萬物の靈たらんものゝ得て安んずべきものにあらず人間もし豚の如く世界はたゞ製造場の如くにてあらんには如此く覺悟するとも亦た不可なしとは思はるれども斯ては切角に高尙なる靈魂を賦與されたる人間に取りて甚だ不名譽の運命あるべし、例へば人の世に出でゝ働くや額に汗し手に鋤を離たずして勉强す然れども家に歸りては妻の慰さめ愛兒の戯むれありて家族共に團欒し或は兄弟親友相交りて同情の念ひを交はすべし此際心に苦勞の念なく亦た利己の慾もあらず必竟食つて而して衣るの外更に其の高尙なる望みを滿足して以て和樂するの外なきが如し。故に彼の時に仙境に遊んで心を無形の中に馳せ念ひを美妙の中に凝め脫俗換躰殆んど世の塵の雰圍氣外に消遙するの樂を要するものは即ち只だ此の如き一種高尙なる望みを滿足して以て自ら省りみ自ら樂しむが爲に在る也。

此故に世には技術と美術との二藝あり技術とは食物を作り衣服を製し家屋を結搆する等大低人の肉躰の望みを滿足させんとて世の必要品を製造するの術なり農工の業の類いは即ち之れなるべし然るに衣食住の三ッ何如に備はればとて尙人の高尙なる望を滿すに足らず吾等は食つて衣て日を送るの外に更に優超美麗なる一種の樂を必要するが故に扨ては亦た美術と云へるものあり音樂、繪畫、彫刻若くは詩歌文章の類ひは即ち之れなり。蓋しこの二つは一たび之を見れば其の相違すると即ち氷炭の如きものにて双つながら相ひ並んで人世に必要なりとは得て思ふべからず例するに彼の詩を咏じ歌を作るの類殆んどろの活世界に用なきが如く思はるゝと雖も亦是れ前に述べたると同一の理にして此世の文明進みて人民の志想の彌いよ進歩せんが爲には是非ともに欠くべからざるものなるを知るべし。此に於てか吾が騷々しき都府の間に奔走して業務を執ると今ま此の閑靜なる地に隱遁して心志を養ふとは共に吾が一身に必要の事たるを思ふなり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

然らば吾人は世の爲に奔走して虛日なき活潑有爲の人々に對して切に其の勞苦の大なるを謝すると共に亦ろの時に心志を閑靜の地に養ひて思ひを高尙の境に養はれんことを切望し更に日本の技術の長大息を以て進歩することを祝すると共に亦た其の美術を相ひ伴つて進歩せんことを希願するなり。思ふに美術にして若し更に進み更に廣く行れんか山川の好風景は常に都市熱沓の間に出現し彼の活潑有爲の人々はその世の爲に奔走さるゝと同時に亦た其情を洗ふの方法を得べし。蓋し幽邃閑雅の地に遊びて怪しげなる石の彫刻を眺め又た活きたる山水の繪畫に臨み或は耳に鳥虫の音樂を聽き自然の調和に詩歌文章の精神を吹き込まれんことは繁忙虛日なき人々に執りては容易に望むべからざることなり、然るに若し此の天然の好風景を寫して美術上の音樂繪畫彫刻若くは詩歌文章を作り出し以て之を繁雜なる都、射利營々たる市、の間に與へなば如何ん人は座らにして技術と美術との客人となり右手に世の爲に利を起して左手に自ら和樂するの玉手箱を懷くものなり如此して始めて文明の眞面目を盡し人をして豚たらしめば世をして製造場たらしめざるものと云ふべき也。

"As soon as beauty is thought has from religion and love but for peasure, it degrades the seeker."

Emerson.

●論說

○女子と衞生（其七）

海軍々醫總監　高木兼寛　演述
林茂淳　筆記

また今日着物が改まらぬと云ふのは御婦人方の罪が有です。主人が歸つて來ると「お暑う御坐いましたらう」と云て洋服を脫がして日本の着物を着せて坐蒲團を出す。と云ふやうですからイケナイのです。御婦人方が洋服になされば御亭主も洋服にするに違ひないです。御婦人方がさうで無いものだから御亭主がヱウロッパへ行ッて歸ッて來てオレの家はヱウロッパ風にしたいと云ッても御婦人方が澤庵と茶漬がいゝと云ふ流義で行くものだから女の勢力の强いだけ其れだけ男の方が弱いのです。妻がスキだと御亭主は其の方に引き込まれるのです。御亭主はコレカラ洋食にすると云ッて洋食を始めても折角コックを雇ッてもパタがイケナイからコックを逐ひ出してしまふやうな譯になるのです。奧さん方が御亭主の日本食をたべやうとするときに「アナタは日本食がおスキでせうが子供の爲めを思ッて下さい、私はアナタと一日も長くそいたいから日本食はおよしなすッて下さい、さうして此の洋食をれ上んなさい」と云へば御亭主は決して米の飯をたべたがり

はしますまい。世間で御婦人方は男に首は上らぬと云なさるが其は表向です。其實はシッリシッリと男をいぢめてお出でなさるです。

住居はドウですか。外國より日本へ歸ッて來ると坐らなければならないです。私の家内などは外國風は大變に嫌ひました。しかし私は强情では負けない積りで强情を張りましたら今では。家内も私より西洋風の方がいゝと云ふやうになりました。大抵は寐臺も半年位でよすやうです。奥さんのある方だと日本風にやりつけてしまふと云ふので男は遺憾ながら首を引ッ込めてしまふのです。

よくこゝの所をお考へ下されて此の國を死にかゝッたまでに爲し來ッたのは何で有るかと云ふと婦人方が十分力を盡しなさることが出來なかッたので有るのですから。婦人方がなさる三つの事が十分で無ければ我々は行き立つことは出來ませぬ。今日の通りにして居るならまだいゝが此のまゝにして置いては迚も今日の通りで居ることは出來ないです。

其れで御坐ますから、「まだ段々申し上げたいことも御坐いますが時刻も遲くなりましたからオリを得ましたらまた申し上げませう。」今日はアナタ方は因循せずに此のことに御注意下ずッて着物は西洋服を着るやうにし、また子供に與へる食ひ物は甘いものを一錢二錢買てやるのはイケナイから食パンでも買ッてやるやうになさい。また住居も男の方で「日本風がいゝ」と云ッても「其はさうでも御坐いませうが我が子が生れもつかぬカタワになることはおイヤでは御坐いませぬか我が國の益々盛んになることを謀るにはこれより外にはよい道が無いから務めて着物も、食ひ物も、住居も西洋風にするやうにしたい」と云ふことを主張なさらなければなりませぬ。

また御孃さん方は足を崩すとシッペーを食ッたりホッペタをつめられたりすることが有りませうが足を崩さないやうにすると子供をカタワにするやうになります。お孃さん方に敎へますがアナタ方のやうに足が短くては靴のカヽトでも高くしなければならぬやうになりますさう云ふ風にするのがお好きで御坐いませうか。さうで無ければ構はず足をお出なさい。「足を出すことは御免なさい。イクラ親の命令でもコレバカリはお許し下さい。若足を出してイケヌとおッしやるならテーブルと椅子と買ッて下さい、さうで無ければ食事の時でも構はず投出ます」とお云なさい。「ドウして、さうする」とおッしやッたら「私はカタワになるのはイヤです」とお答へなさるが

宜しい。京都で七つか八つの女の子が足を投げ出して食事をしたそうですが「ドゥした」と云と「演説を聽きました所が坐るのはよくないと云ふことです」と云ッたと云ふことで有りました。其れは京都で演説した直き後に聞きましたのです。日本の人は何分外國の人に比べると小さいです。東洋の島々に日本人ほど小さいのは無いです。日本人がよく小人島がドウだ。などゝ云ひますが今日の所では自分が小人島の人です。これにつけても、よく目的をつけて出來るたけは着物と食ひ物と住居を西洋風にするやうに願ひます。

他日機會を得ましたらまた申し上ます。物にはヨイことゝワルイことが御坐いますから私の申し上げたことに付てもヨイ所をお採り下さいまし。此後アナタ方に再びお目にかゝりますときには今日と變ッて居ることの分るやうにあることを願ひまする。

○酒の害　津田仙 述　若林玵藏 筆記

左は頌榮女學校に於て演述ありたるものゝ筆記あり

偖て今日は衛生の演説が御座りまするに付私にも一場の演説をする樣にと云ふ御依賴が御座りました今大醫先生方が色々利益になる處の御話をなさいました跡で私が演説を致すとになりましたが固とより私は醫者でも御座りませんから衛生のことは知りませんが兼て蘭書で衛生のことを見まして酒の害を知り自分が酒を止めました故に酒の害と云ふ演説をしやうと思ひます。

此論題に掛ります前に鳥渡申したいことが御座ります世の中に色々ある仕事は澤山御座りますが其中で衛生術が最も肝要で御座ります此學校は兼てより私も其成立を能く存じて居りますが本校は即ち完全なる道德を敎へますそれに加ふるに衛生の演説をなさると云ふことを聞きましたが實に賀すべきことであらうと存じます何故と申しまするに人間に二つの大敵が御座ります其一は心に關する邪道で御座りますこれを防ぐには道德即ち宗敎を以て防ぐより外に仕方がありません今一つは病氣で御座ります人の病氣を起すことは人間の一番大敵で御座ります此大敵を防ぐには主として衛生を講ずるより外に仕方が御座りません荀子に百戰百勝は巧の巧なるものに非ず戰はずして勝つものは巧の巧なるものありとありますが此學校に於て衛生を講ずるは巧の巧なるもので御座ります假令へば悪事を爲し良心の辨護人を賴み其裁判に勝つのは戰て勝たのでありますが道德を修め罪に陷らさる者あれば戰はずして勝た者

で御座ります又醫は仁術なりと云ふことが御座ります實に病を癒すのは醫者の術でありまして人が病氣に罹り醫者が術を施して病を癒すのは結好なことで御座りますが今一步進で衞生を講じ醫者の厄介にならなければ尙ほ巧の巧なるもので御座りませう故に玆に演說をなさる方は仁の仁ある者と申して宜しいと思ひますアナタ方は此學校で道德を修め又衞生を講じて煩はずに子孫の繁昌を招くには之れより肝要なものは御座りません誠に此御企は結好なものと思ひますから賛成致し私しも及ばずながら御招待に應じまして是れより酒の害と云ふことを少しく御話し致します。

皆さま御存じの通り酒を造るには葡萄、麥、米杯を以て造りますが葡萄は喫べましても誠に良い食料で御座ります麥も米も誠に良き食料で御座りますがそれが酒になると害を爲すと云ふことはどう云ふものであるかと云ふことを摘で御話し致します人の食物と云ふものは唯腹が減て食う爲めに人間が生きて居るものではありません生きて居る爲めに入用なものを取て食料と致します故に養ひにならぬものは縱令旨い物でも食はねが宜しい今日身躰を使へば其使て減た丈けは食物から補はなければなりません人間の身躰の熱いのは火が燃へて居るのでありますから其燃へて減た丈は食物から補はなければなりません食物は都ての物を喰べなければなりませんが其重もなるものは二つあります一は熱になる物一は肉になる物で御座います其中肉よりも熱になる物の方は四分の三位餘計に喰べます即ち酸素を起すもの脂肪バタ酒酸の類は皆な身躰の中に入て熱を起します又肉を拵へるものは牛肉鷄卵の白味チーズ杯でありますが之れは窒素から出たもので即ち肉になります而して酒は此の中で燃へる方の部に入て居ります何故食物に酒を飲ではならぬかと云ふ例を擧けて申しませう。

酒は身躰の中に入ると身躰に在る酸素を引て自分計り燃へます即はちアルコールで御座ります故にアルコール、ランプに燒酎を油の代りに入て點せは青ひ火が燃へますが其眞は少しも燃へません若し石油を用ふれば油と共に眞が燃へますがアルコールは眞が燃へません是れはアルコールの性質でありましてアルコールが胃腑に入れば他の酸素を取て燃へて仕舞ひ脂肪計り殘て居ります故に酒を飲む人は身躰が人よりも肥て居りますが是れは肥るのではないアルコールの燃へない物が身躰に遺て居るので御座ります酒を飲で遂に病を起す人が往々御座りますが酒を飲で害になるは西洋酒であるか日本酒で

あるかと云へバ何でも酒でさへあれバ皆な悪いので御座ります日本酒の中には百分ノ一五、七アルコールが御座ります又葡萄酒には百分ノ七〇アルコールを含で居ります故ゑ縦令アルコールの弱いものでも澤山飲ば害にあるとは同じで御座ります假令バ日本酒一石の中にアルコールが一斗五升御座ります又強いものなれバ一斗七升も御座ります之れハアルコールの分量の多少に因て害の多少があるので御座りますアルコールハ餘程害のあるものでありまして水呑に酌で犬に飲せればワンと云たぎりで例れて仕舞ひます猫でも通例の盃に一杯飲せれば矢張り其通り例れます又少しもアルコールを飲むとのない子供に香う丈けの分量にして飲せれバ直に倒れます斯の如くアルコールハ毒物で御座ります若し人が毒を飲み之れは毒を飲む皿であると云へバ其皿に食物を盛て喫べるものハありますまい然るに酒あれバ人にしい自分も飲みますがドンナ毒でも分量をして飲めバ倒れるものでハありませんから酒も少し飲めバ倒れませんが必らず害になります然るに酒を悦で飲むと云ふのハ氣の知れないとで御座います。

食物の人間に毒であるか養ひであるかと云ふとハ舌でも知れます舌の先きハ何にか味ひ眞中ハ食慾を進め元の方ハ彌ゝ毒であれバ食物を銜返へす力を以て居ると云ふとであります唯食物へ舌を付けた許りでハ分りませんが舌へ風を入れ乾して然ふして其の先きへ食物を付けれバ厭な心持であります眞中ハ能心持で後の方は其を納めても宜しいと云ふ様になります極く毒なものになれハ舌の元へ付けると戻すとがあります酒ハ舌の先きで味た時ハ間接の毒でありますから飲まない方が宜いと云ふ、所が眞中の所でハ食慾で進むのであります故猪口に因て甘いと不味いとがあります其れハ何の譯かと言ふに全く猪口の形が舌の先きへ障らん様に眞中へ酒を持て行けバ這入りますそれを直くに受付へ持て行く様あ猪口ハ受納あらんと云て飲まあい故に受付をツーット通て眞中の役人へ渡す様あもので此の猪口ハ甘いと云ふのハ受付に相談しあい様にするので御座います酷く酒の好きな人に升酒を飲ませれバ不味そうな顔をして飲んで居るのハ受付と眞中の所と喧嘩して居るので御座います然う云ふ天然の性質を持て居るものを酒を飲めバ顔色が櫻色に成て口上が爽快に成て心持が能く成て來るからと云ひ酒ハ百藥の長と申しますが百藥の長どころでは御座いません壽命を縮むるもので御座います英吉利亞米利加などでハ人命保險會社と云ものが御座います其ハ私ハ月

々幾干納めたら宜しからうと云ふと保險會社では其の人が何歳位まで生きるから幾干納めろと云て其の死んだ時に幾干拂ふと云ふことをして居ります其れは誠に宜しいとで御坐います此の會社は商賣で御坐いますから人命の事を自分でも調べ政府でも保護して貰らひ統計表を拵へます其の統計表に酒飲みと酒飲みでない人ではどれ丈けの違いがあるかと云ふとが載せてあります今保險會社で調らべたのは幾万人と云ふ大勢の人を集めて經驗したので御坐いますが二十歳以下のものは酒を飲まんものと見做し二十歳以上のものを調らべましたに上戸の人ハ三十五までの壽命を保ちます又下戸なれば四十二年ほど生きます六十二歳は人間の壽命で御坐いますに三十五歳は上戸の壽命で御坐いますから二十七年の壽命が違ひます尤とも統計と云ふものは大勢の人を調べたので中には酒を飲まない人でも二十一歳位で死に酒を飲だ人でも八十位いまで生きた人が御坐いますが大勢を集めて見れば酒を飲むものヽ方が壽命が短かいと云ふとか慥かに分ります又た或る人は上戸でも酒を澤山飲んたら命を失なふとがあらうが酒は量りなし亂に及はずと云ふともあるから少しなれは宜しいと云ふ説がありますが千八百三十九年から千八百四十年まで英國の陸軍で「ゴルチル、サイチルと」云ふ人が印度へ在勤しまして凡そ千人の人を試めしました即はち千人の人を三に分けまして一は勤番中用さへなければ酒を飲んでも宜しいと云ふとを許し又一は少し位は飲んでも宜しいと云て許し又一の隊には一切酒を禁じました所が第一の用さへなければ飲でも宜しいと云たものは千人の中四十六人死に少しは宜しいと云たものは二十三人丸で禁じたものは十一人死ました然うすれば少し飲めば少し損かあるタント飲めはタント害があると云ふとが分ります故に酒は少し飲でも宜しからうと云て死るヽとが出來ない然ふすると又或る人は今の比例は暑い天竺へ往たからである寒い處なれは却て酒を飲だ方が煖まッて宜しいと云ふか知ません之れにも例がありますが北極地方の測量に氷の上を三百里も往たものがあります大勢の人を連れて段々寒くなり寒氣に堪へなくなりましたが其の中に酒を飲む人から段々死で酒を少とも飲まない人は生き殘て還て來ました又加奈多や何かで雪の降て凍へて居たものが一人は酒を飲む一人は酒を飲まないと云て爭ひを致し酒を飲た方は一時は活潑になッたが遂に死で仕舞ひ飲まないものは助かりましたから寒地でも暖地でも酒を飲めば夫れ丈け損かあると云ふとが分ります酒は

どう云ふ毒があるかと云ふに先つ肺病、僂麻質、癲癇、心臓病、抔其外風を引くとかなんとか云ふ病ハ澤山起りませうが重立た處ハ右樣で御坐ります又狂癲病院に入て居るもの丶四分の一ハ酒を飲で狂氣に成たので御坐ります酒を飲むものハ其當人が害を蒙むる而已ならず其害を子孫に遺します亞米利加に斯う云ふ事が御坐います或る夫婦がありましたが六人の子供が御坐いました初めの二人が生れたのハ夫婦共酒を飲まなひ時で御坐りまして息子と息女が生まれました其後ち夫婦共酒を飲む樣になつてから子供が四人出來ましたが其中一人の息子ハ虛弱で何も出來ないものになり三人ハ馬鹿が出來ました是も全く酒の爲めで御坐いますそれで親が酒を飲めバ子供が馬鹿になりますが其馬鹿になるのハ父親が飲でも母親が飲でも同じとて御坐います併しながら最も婦人の酒飲ハ子供に多く害を及すと云ふのハ酒を飲だ乳で御坐います十箇月許り腹の中で養なひ又十ケ月計り生れてから乳を以て養ふから婦人の酒の爲に害を子供に與へるハ男子よりも甚たしいのであります若し乳母か酒飲なれバ矢張り子供が其害を蒙ると云ふのハ乳の中に酒が入るからで御坐います故に酒を飲で居て子供に乳を飲ませるハ宛かも子供に毒を飲ませると同じで御坐います實に恐るべきとでハ御坐いませんかそれを婦人で居なから顔を眞紅にして子供に乳を飲ませて居るのを幾人も見掛けますが其毋ハ子供の爲めに酷い事を致すもので御坐います。

(以下次號)

● 叢話

○三人の姫　（第一段）

むかしブリテンにレア王と云へる君主をハしけり三人の姫ありて長をゴチリルと云ふチルハチー侯の妻となれり仲をレーガンと云ふコルンチール侯の夫人なり末をコルデリアと云ふ御歳尙ほ若くして何方へも嫁き玉ハず此頃ろ王宮に客寓せるフランスの王及びバルガンデーの侯は此の末の姫を貰受けんとて双方一時に來られたるものとぞ云へり。

然るに此時レア王齡すでに八十路の上を超えて日々の政を聽くに慵うしいざ國事を年若き輩に托して最早老先き短き余命を閑靜に送らバやと定めて三人の姫を近う招き其の父を愛し思ふ情の多少に應じて國領を分ち與へんとは申されぬ。

扨ても其時最先に之に答へたるは長の姫ゴチリルなり自ら誓つて白さる丶樣ハ妾が父上に於けるは猶ほ自らわが眼または

生命または自由なんどに於けるが如きよりも更に親しとて元來心に誠ならざれば何如ほどにも其辭をつくろひ得べし最と熱心なる口風して申されける王は之を聞て太たくよろこび直ちに父の眞心を發して姫と其夫とにブリテン王國の三ヶ一を分與されぬ。次に之に答へたるは仲の姫レーガンなり其性姉君と均しく空虚なる躰なれバ辭を造り出でんと難きにあらず更に心を動したる風して申さるゝようは姉にて在はす方の御答ありたる趣は倘ほ妾が心中に思へりし由を盡すに足らず妾が父君を愛するの愛を以て之をあらゆる其餘の愛情に比べ見んに恰かも是れ日中太陽の獨りひかりかゝやくが如し何如に其外の樂あらんとも父を思ふの心に對せては皆な死せるが如く感ぜられ候とは答へぬ王は斯程までに己が身を愛する子供等を有てるとを太たく喜び亦直ちに王國の三ヶ一を與へて此の姫の忠なる誠の報美とはなされける。

末の姫コルデリアは兼て朕が尤も愛したるものなり定めて二人の姉に優れりとも絶えて劣れるようの答すべからずと想像して何如に姫この父をば何程に愛し玉ふやと問はれけるコルデリアは姉達が心にも無き輕薄の辭を呈して口に適はざる程の誠をば現れし只管らに父を迷れして其所領を奪ひ取り己が夫と共に其地を押領せんとのみ企つるよし見てあれバ此際くどくしく申さんとの腹たゞしく何んとなう心鬱して最と氣傲らしく答へらるゝようは妾は父君に對するの義務相應にこそ愛し參らす其外に多くも少くも候ハずと言ひ離ちたり。

王は其最愛の子よりして斯る失敬なる返辭を得て愕然として驚き今ま一度よく考へて答へ玉へ其辭によりて御身が運命に不幸を來らせなんよく考へて應らへ玉へと再應心づけして切めて姉ほどの誠をも現せかしと祈りたるは平素わけて之を慈しみたる親の情なるべし然るにコルデリア姫は更に沈着て申さるゝ樣陛下は足らハぬ此の身を育くみ玉ふのみか心限り愛して斯く迄御慈しみを崇らさせ玉へバ妾はたゞ之に尤も相應しき程に父君を愛し參らせ倘ほそれ程に父君に從ひ參らせて御徳を崇めまつるの外なし妾はもとより姉君の如く大なる言ばを申すとハ得せず亦た此世に於て其外の何物をも愛せずなど御約束し參らするの勇なし姉君は父を愛するの外何物をも顧みずと仰せなれども既に人に嫁して夫とし從ふべき人のあらん限りは其の心付も其の心盡しも亦た其愛情も半ばハ皆なこの夫の爲めに取り去られ玉ふべきならずや左らば妾にして若し全く父君を愛し其餘一つの物をも心に思ハじとならバ姉

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

君の如く人に嫁ぐとは得てなし申すまじとぞ述られける。

抑もコルデリア姫は尤も其父を愛し玉へば固より彼の二人の姉達が心にもなき誠を盡されたるほどの誠は元と其心中にありしとあり平生にてあらば此の心中を更に愛らしき更に姫らしき言の葉もて述らるべきを彼の狡猾輕薄の人が父を僞はりて眞ならぬ追從の盟を爲すを見ては此際たゞ默して而も心に在らん程の愛を盡すの外なしと定めつゝ扨ては斯く文なき返辭をも申されたるなり。

然るにレア王は此の答を以て、甚だ不遜の辭となし元來氣短かにて在はせるが老の常として倚更らに心亂れ易く今まは追從と誠實と言語の上の答と心より出る返辭とを判別ずべき力もあらず半狂亂の情はすでに眞如の理性をかくして赫と怒り末の姫にとて計らひたる殘の所領三が一を更に二分して二人の姉に分ち取らせヲルバチー及びコルンヲールの二人を召して其志を告げ王の冠を二人の間に置いてブリテン王國の歳入、權力、及び政治を悉く之に任せ身はたゞ王としての虛位を抱いて閑日月を樂しむべし但し一百人の士を從へて隔月に二人の宮殿にさすらうべし婿どのはたゞわれと此の士どもを宜しく扶持し玉ふべしと仰渡されたり。

此事總躰に聞へ渡れば宮中の騷ぎ一と方ならず滿朝の臣下皆な王の暴斷に驚き果つれども誰として之を諫むべきものなし茲にケントの伯と申して平生レア王を父とも思ひ參らせ王の爲にとあらば將碁に弄ぶ兵とありて先づ倒るゝとも少か恨みなしと覺悟せる一人の忠臣あり今まはレア王の一身に王を害するところの敵一人住へるが如しこの敵を打倒すは即ち平素王の爲に戰つて敵を殺さんとするわが責任なりと心得て面を犯して諫めを申上たり元來つねは何事にもレ王の御相談を辱ふしたれば只今も亦た身を提さげて三人の姫方の御心根を眞に測り申さん末にて在はす方が斯く殊更に冷淡ならぬよしは臣が生命をかけても盟ひ參らせん臣か命はもと陛下に捧げたるものなり此際何如に陛下の逆鱗に觸るゝとも此の一言を申さずして止むを得ずと諫めたりける。

○八月十八日木村鐙子の一周忌に當りてよめる

弔ひ歌　"The Last Rose of Summer."

やまたかくして　ことばなく
みづはしづかに　おともなし
あゝなつかし　ゆきにしひと
たれにかつげむ　わがおもひ」

そもひにたへず　やどいでゝ
ひとりみぎわに　たゝずめば
あゝなつかし　ゆきにしひと
かゞみにうつせ　なきすがた」

○木村鐙子小傳の序

左は外山正一君が此頃出版すべき鐙子が小傳の序として記るされたるものなり元と羅馬文字なれども今譯して之を邦文とす

過日高等女學校の卒業式の時御目にかゝりました節鐙の小傳へ添へるものを何か書いて下さいと御賴みがありましたから何か書きませうと思ひましたが鐙君の德は既に巖本君及び勝先生などが十分に述べられましたからモー何も云ふべきことを殘しては居りませんとは思ひますが私は君並びに鐙君とは二十年ほども御懇意の事でありますから重複をも顧みず寸志ばかりを述べませよう。

君にも能く御存知の通り人類の如く男女兩性のあるものは兩性合して始めて完全を爲すものでありますから男ばかりが人間のやうに思つて居るは大なる誤りであります昔から妻の力を假りて家を興したり身を立てたりしたものでさへ澤山あるではありませぬか細川忠興か家を興したは大に其奥方の賢女ありしに由り山の内家の起りたるも亦た令堂の力大に與りし所あるが如くに言ひ傳へてありますがピーターゼグレートが大功を奏したるもザーリナカセリンの賢なるに由れること少くなからずと言ひますナポレオンにはゼヨセフヒンありローランドにはジユーンフヒリポンありて其夫を補佐するの仕方にこそ異同はありたれ何れも皆な大に夫の事業を助けたるものであります有名なるジヨンスチウアートミル氏の如きは多くの書を著はして名を万國に轟かしましたがミル氏の考の中で善きものはハルリエットテーラー夫人の賜ものなりしと云ひます人は男女兩性合するにあらずんば完全なる躰を爲すことは出來ざるものでありますが二性合しても完全なる躰を爲すことは至つて六つかしきことである中此等の人の如く夫婦よく相ひ助けて世に處し義務を盡すことを得たるものは實に幸なる人々であります斯の如き人は決して世に多きものではありますまい今まかへり見て君と鐙君との仲を考へ見ますに君も亦た此稀れなる幸を受けられたる人なりと思ひます鐙君は君の爲にはザーリーナカセリンともマダムローランドともハルリエフトテーラーとも云ふべきものでありたりと思ひます私が斯

く申す譯は二つあります我國の貧書生が海外へ留學せんとして常に憂ふる所のことが二つあります一つは留學費の莫大なことで一つは留學中家族の養ひ方のことでありますされば ヤット留學することを得て一身不亂に勉强最中本國なる家族の許より種々の困難を申し來るが爲めに止を得ずして半途にして歸國する如き眞に氣の毒千万なるものも往々あることですが君の如く妻子のある身分にて十餘年間首尾よく海外に留學して目出度卒業して歸りたるものは果た幾人ありますか實に稀れなる幸と云ふべきではありませんか然るに君が此の稀れなる幸をば受けられたるは大に鐙君の耐忍に由るものではありませんか之れ鐙君が君を助けたる私が知る所の一事であります今ま一つは明治女學校の事であります女學校創立の由來は知りませぬが君が女學校に於て能く女子の敎育に盡力することを得られたるは鐙君の補佐ありたる爲めなることは疑ふべからざることであります今日女學校の敎育事業を君が他人の手に委ね置かるゝに至りたるは君に於て前后變はりたることのありたるにてはなく全く鐙君が世を去られたる爲めでありませう是れ私が知る所の鐙君が君を助けられた事の二であります。

鐙君が君を助けられたることの多きは上に述べたる如きでありますが鐙君は君を助くることの多かりし、その、世の爲に知られんよりは寧ろ鐙君が世を去られたる今日に於て君の宗敎上並に女子敎育上の熱心が少しも鐙君存生の時と異ることなからんことを願はるゝでありませう然し乍ら君は今后何如なる配偶を爲さるゝかは知りませぬが苟くも鐙君が嘗て指にせられたる指環をはめらるゝ婦人ならば姿形は何ほど鐙君と異同あるものあるも貞操節義に至りては少しも鐙君とかはることなく鐙君の如く宗敎に熱心にして女子敎育に盡力し鐙君の如くに君を勵まし君を助け君をして鐙君在ませし時の熊二君と少しも異ることなからしむる如き婦人にてあらんことは私の疑はざる所であります御委賴につき思ひしまゝを少さか述べたまでゝ御座います敬具、二十年八月九日

木村熊二殿　　外山正一

○入湯及び皮膚を洗ふ事

女學雜誌第七十號に皮膚の摸樣及び沐浴の事と題し圖を掲げて細かに説明したるものあり讀者は之によりて身躰の皮は如何なるものかを知り亦た沐浴の何故に大切なるかを承知ありしことあるべし但し其際僅に少しく畧し置たる箇條もあれば今更に其趣を簡畧に論じて一層明白なる實例を示すべし

蓋し前號の圖にも現はしたる如く人間の皮膚には無數の毛穴あり其下には線の如き氣の通ひ路ありて躰内より吐き出すものを泌散するのみか尙ほ甚だ大切なる一つの働を爲すものなり其は躰内を運り行く血液は追々にキタナクなりて種々の不淨物を液中に混ずれば時々は之を淸めて其血を淸潔にするの工夫緊要なるより即ち右の血液躰内を運行したるの末皮膚の下に現れ來り玆にて空氣の作用を蒙り其不淨物は毛穴より逃れ出で殘餘の淸き血は再び躰内を運るとなり故に毛穴を開けて自由に此不淨物を泌散さするとは肝臟、胃の臟、又は腎の臟肺臟などに執りて由々しき大切の事たると知るべし若し躰にアカ多く溜まりて毛穴の通ひ路自由ならざれば此等の諸臟は直ちに大なる害を蒙り全身に疾病を惹起すべし

斯く云はゞ僅に毛穴ごときものを多少塞さぎたりとて何程の害かあらんと云ひて前の論を奇しまるゝ方もあるべし然れど既に前號にも述べたる如く一つ一つの毛穴は何如に小さく見ゆるとも人間一人の全躰に存する毛穴と其下に續ける水氣管(不淨物を出す線)との長さを計れば殆んど合して十一里十一町程の長さあるものゆへ此の通ひ路惣躰よりして發散する所の分量は實に莫大なるとを知るべし左れば現に入湯を怠りて身躰を不潔にする人は或は頭痛を感じ或は何となく不快に覺え夫れより段々と身躰弱はりて遂に非常の大病に陥るべし其理尤も明白なるものあり昔し法王レヲ十世と云へるが或演劇めきたる事を爲すとて小供の全身に金粉を塗らせ其役を務めさせたるにこの憫れむべき小供は數時間にして即死したりと云へり此は即ち全身の毛穴を塞ぎ不淨物の出路を止めたるゆへなり彼の身躰を淸潔にするとを怠るものは殆んど此の身に金粉を塗ると同樣の事を爲すものなり眞に恐るべきとにあらずや世の成人は云ふに及ばず幼な子を育てらるゝ母親なども能く此理に注意して入湯及び皮膚を洗ふ事を輕忽に爲さゞるよう用心ありたきものなり

〇批評　（第二十九回）

(39)　つれ〴〵草講義第一　（大本一册(二十葉)定價十二錢　發兌所東京日吉町女學雜誌社）

此書は鈴木弘恭君が下田歌子輯和文教科書を所々の學校にて講述ありたるを山村亮作君が筆記したるものなり此卷は即ち和文教科書第一徒然草の部を講述さるゝが故に題してつれづれ草の講義とは云へり本社出版の書なるが故に是非の批評は一に諸君に任し例に由りて玆に言はず只だ其中一節を擧げて該書の趣旨の在る所を示めす

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

(十四)和歌こそ猶をかしき物なれ。」あやしのしづ山がつのしわざも。いひいづればおもしろく。おそろしきゐのしゝも。ふすゐの床といへば。やさしくありぬ。一節

是は歌の事を許したるなり○和歌は詩に對して和歌といへるなれども後世はたゞ歌といふべき所をも和歌といふは非なり此所は上に文選白氏文集老莊のとあどいへればそれに對して和歌といふなり○をかしきは面白きなり○あやしのしづ山がつのしはざもは田舎の人の耕耘し山家人の木こり炭やくありさまは都人の目には怪しく人數にもあらぬやうに思ふべけれども春の田をかへす云々柴木かる云々炭がまの烟云々あど歌によめばいと風流に聞こゆるとあり○おそろしきゐのしゝもは猪は猛獸なれども歌に示す爲のことなどよめばやさしく聞ゆるとなり○やさしくは優美といふことなり。

大意は日本の歌こそやはり面白きものであるがマアいかゞしき賤の男や山家の人のするはざも歌によめば面白く聞え恐ろしき猪のしゝもふすゐの床などと歌によめば優しくなりて聞ゆるとあり。

"This one original product of the Japanese mind is the native Poetry." Chamberlain.

●佳傳

○徐庶が母

三國志に傳して云ふ昔し漢の天下魏呉蜀の三つに分れて英雄四方に起りたる頃ろ賢德宏大にして能く人を用ゆるは劉備玄德あり左れば忠良義勇の英傑にして雲の如く其下に集りたる固より多かる中に初め單福と號したる徐庶と云へるものあり葛の頭巾を戴き布の衣を被て高らかに歌を謠ひ新野に玄德に會ひて既に舊識の如く直ちに用ひられて其軍師とは爲されぬ樊城の一擧乍ちまちにして曹仁が堅軍を破る智畧尋常ならずと云ふべし曹操驚いて之を何如にかせんと云ふに程昱と云へるもの策を獻じて云ふ徐庶は元より至て孝行なるが幼にして父を失ひ唯だ一人の老母あり今は其弟失せて母を養ふべきものあければ丞相若し之を招き寄せ之に書を認めしめて徐庶を召び玉はゞ彼れ直ちに至らんと云ふ之れ宜しかるべしとて直樣人を遣して老母を召しよせ曹操自ら待てなして申けるは近來汝が子の徐直元天下の奇才にして新野の逆臣劉玄德に事ふ是れ玉を泥に墜とすが如し豈に惜しからずや願くは老母の方より書簡を送つて此處へ招き寄せよ我天子に奏問して申し高官を授くべしとて硯と紙とを與へければ老母問ふやう劉玄德

とは抑も何如なる人にて候ぞ曹操が曰く沛郡の小輩叨りに皇叔と稱して全く信義を知らず外は君子の如くなれども內は小人なりと老母すなはち眼を怒らして申しけるは汝ち何ぞ詐を云つて我を詐くぞ夫れ玄德は中山靖王の後胤漢の景帝の玄孫にして堯舜の風を學び禹湯の德を懷く况んや身を屈して賢を招き己を恭やしくして人を貴ぶ世の老幼木こり牛かひ迄でも其名を知らずと云ふとなし眞に當世の英雄なり我子幸に此人に仕へたるは宜く其主を得たるものなり汝は名を漢の丞相と云ふとも其實は漢の逆賊なり却へつて玄德を逆臣と云ふは自ら心に恥づべし何ぞ我が子の明なるを弄びて暗らきに向はしめ万代の惡名を取らんやとて筆を地に投げ硯を取てつ曹操に近付きければ曹操大に怒つて早く斬て棄てよと引出したり此は老母自ら殺ろされて我子の志をはげまし彌よ玄德に忠を盡させんとなり程昱之を知りければ曹操を諫めて老母をいたはり昔し我は徐庶と兄弟の如くありき故に君は猶ほ我が母の如しと云つて厚く持て成ければ老母も亦た屢ば書を送りて之を謝したりける程昱即ち此手跡に依て僞書を作り徐庶が許に送りて其一日も早う來らんことを申送りたり。徐庶は母の書を見畢りて湧泉の如く直に玄德に見へて申しけるは臣初め荊州の劉表に見へて合はず司馬徽に叱られて君が足下に來り市に面して直ちに用ひらる臣が本心は君に仕へて犬馬の勞を効すことを願はざるに非ず唯だ老母の囚れたるを以て力を盡すことあたはず今しばらく御暇を乞ひ請けて老母が行末を見きはめ若し棄て玉はずんば再び參るべしと云ふ玄德も亦た涙を落して快よく之を許し母子の間の事はわれ之を絶つに忍びずとて之を野外に送り慟哭して別れ玉ふ徐庶が昔て王覇の業を圖りたる方寸はいま老母の困しみに依てみな亂れ急いで曹操が許に至る曹操が曰く御邊が老母堂に在り朝夕これに仕へて子たるの道を盡せ我も亦た淸よき論を聞んと徐庶拜謝して退き老母の前に出て堂下に再拜しければ老母驚て申しけるは汝なにとて此に來れるか徐庶が曰く近ころ新野に在て劉玄德に仕ふ老母の招き給へる書簡を見て夜を日に繼て馳せ來れりと老母大に怒り色を變じて申けるは汝ち世上を流浪すること二十餘年儒業定つて日々に進んで常に嬉しく思ひしが今まなにとて昔には劣りたるぞ汝ち幼より書を讀で忠と孝とは二つながら全することを能はざるを知るべし又曹操は君を欺き上を僭める賊なるをも知るべし今ま玄德は皇室の冑英才世を掩ひ仁義四海に溢る天下誰か仰がざらん我れさきに汝が玄

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

德に事うると聞て善君を得たりと悦ばしく思ひしに何ぞ一紙の似文を見て眞僞をも詳にせず明なるを棄てゝ暗きに向へるや汝まことに匹夫なり我なんの面目ありて汝に對面して先祖の名を汚んや天地の間に今より生たる甲斐なしと言ければ徐庶本より孝心深きものなれば老母の言を聞て理に服し階の下にひれ伏し頭をも擡げずして居たりけるに老母急に起つて屏風の後へ入りけり頁ありて人走り出で老母いま梁の間にて頸を縊め給へりと告げければ徐庶駭きあわてゝ行きたるに早や息たへて失たりける。

○グローシアス夫人夫を救ひたる事　（其二）

斯て獄の門に達しぬ獄司の妻もし本箱の内を撿ためたらんには万事則ち畢るべし然るに此日は前にも述べたる暴風雨荒れ渡つて尙ほ止まざれば此妻元來ぶしやうにして役目を重んぜざるより只其儘に一見して差支なし通せと云ふエルシーはホツト吐息して先づ恙がなく此の第二の危難を免れ水かさ増して急流矢をつく如きワール河に舟を解き二人の水夫は兵卒に代つて漕ぎ行きたり此時エルシーは頭にハンカチーフを覆ふて風にたゝよはす水夫ども笑つて斯る蓋は雨を防ぐに何の効能あらんやと云ふ然れど此は即ちグローシアスを略ぼ難なく連れ出したりと云へるを獄に殘りたる夫人に知らせんとの合圖なりけり眼に涙して遙かに獄の窓より眺めたる夫人には此折の喜果して何如ありけん。

斯る危險を侵してグローシアスをゴルカムなるダートサレーアの許に送り出したるはかの侍女エルシーの力固より少からずと雖も必竟は夫人がよく志を決して斷行したる其の勇膽に出ると甚だ多しと云ふべしグローシアスはダートサレーアの家に至りたるのち其家内の人の迷惑とならんとを氣遣ひ寧ろ自首して獄に歸らんと云ひたれども人々が信切なる取扱によりて安んじ暫らく其邊にかくれたり然るに獄中のさはぎは一と方ならず急使をハスデンに送りて獄司に報じ八方に人を派して搜索油斷なしと雖も影だに見當らず元と囚い置たる二の室に行て見れば籠の鳥夫人の望めるが如く脫し去りて在らず本箱を送りたるダートサレーアの家に行て見るに只リンチル洋紙のくず散亂するの外何物もなかりけり然るに暫らくして近國に賢名を擧げたる人を何者ぞと見るに此れ即ち彼のグローシアスが去つて其地に用ひられたるにて在りける　（終）

A wife is manne's help and his comfort:
his paradise terrestre and his disport.
So buxom and So virtuous is she,
They Master heedis live in unite.

Chaucer.

●小說

○薔薇の香

第七回　朋友の愛　　月の舍　しのぶ

靖國神社の境內を眼下に見て空中に廣大なる庭園を作り後ろに九段坂の燈臺を眺めて遙かに通夜のあかしを建つ但夜あれば芙蓉の峯を望むに由なけれども名は定まつたる富士見町往來の人も反り見する結構壯んなる住家あり表に從五位何某と標札うつて玄關いかめしく嚴そかなれば洋犬も自ら心上りして最と橫柄なる顏付やすべし然れど今ま平生われを撫で愛する恩人の歸らるゝと見ては先づ一二聲喜びの祝砲を發つて脊を低うし足を張り頭と尾を一時に動かしてにじり寄りたり二輛の車に三人の女生徒を載せたるが一人乘つたるは即ち波羅香女と知られたり手早く降りて車夫に向ひ

鶴吉、それでわチー能つく姥やにそう言つて下さい、アノー幸ひ青山さんにも久し振りで御目に懸つてチ今夜色々お話も伺ひたいし是非一處に泊まれと仰しやるからチ此の白河さんの處へ御厄介に爲りますッテ而してチ明日は大抵十時前に歸りますから姥やからお父さまに左樣申上げて下さいッテ、チ能くそう言つて下さいよ

洋犬の頭をしきりに撫でゝ甘やかすは問わで此家に住ふ白河光女なるを知る此時靴を脫づして

青山さん波羅さんどうぞ此方へ

二楷の一室は兼て光女が書齋と定め置かれたる所あり案內に隨つて二人の客は玆に通る凡そ何如に親しき朋友も初めての座敷に至れば少し他人らしくあるものなるに夜目とは云へ社內の景色淡墨の畵の如く現はれ一采の白雲櫻花わりと云へる邊に棚引くなど中々多くあるまじき樣なれば如才なき波羅は坐りもあへず

大層お立派なお住居ですチー而してマアあの景色は………

ナンテスカ叔父が物ずきですから………

と先づ例の冷やゝかなる枕詞を台に据置き

ちよつと御免下さい……そして衣物を之にお替なさいましご窮屈でせうから

出でゝ行く光女のあとを見送つて立ち乍ら洋服を脫ぎ脫ぎ乍ら其處等を步み廻つて本箱の前に來り

ちよいと青山さん大層書物がありますチー

半ば服を脫ぎかけて立も得やらず膝を立てゝ見廻り乍ら

ソッチー勉强家だから大變よ今夜の文章は能く出來て居ま

したがネあなたの演說には本當に感心したのよ

イヤデスヨ何が感心なもんですか、どうもネ演說なんて初めてゝすからブル〳〵震へてネー聲が何んだか身に副はないようで何處から出るんだか分らないのよそして時々つかへると汗がスット湧いて出るノ本當にモー演說は懲り〳〵よ

ホヽだつて樂屋はどうせいろ〳〵お心配がありまさあネ私等にはちつともソンナ風が見へなかつたからそれであんなに拍手喝采したのよ

甘くお言ひなさるよ……白河さんの沈着には驚ろいたじやありませんか

此時どん〳〵と登り來る當の人物に此話は暫らく途絕へぬ

眞に失敬しました……靑山さん大層お久し振りでしたネ

バア丁度此頃少し休みでしたからチヨット歸りました！今夜のは能く出來ましたネー

ナアニつまりませんもので……

靑山さん今日御一處に居らつしたのがお兄いさまですか

ハアそうです

ちつとも似て居らつしやないのよ

イヽエ似て居らつしやいますワ然し大層お氣詰らしいことネー

氣鬱家で困りますよそれで丁度私とウラハラで補ひ合ひますのですがネ時々は變な議論でホヽ面白う御座いますよ

そうで御座いませうそれでお兩人とも互ひに幸で居らつしやるのです私はいつも雜誌などでお兄いさんのお說を拜見して居ますが大層考の深いお方です

兄の事を賞めらるゝは榮に取つて何よりの幸福なり常に笑まじげなるは其の持前なれども此時の笑ひは更らに一種の別品を新調したるが如く豐にニッコとしたり波羅はたゞ白河の樣姿に注意するとき白河光はふと氣付たる氣色して

アナタはもう直に卒業でせう

ハイ此夏でマアお仕舞になりますが……

そうですネーもうそうですかネー早いことあなたは好い學校へ行つたものだからヅン〳〵と先へ行つて仕舞うのよ

波羅は急に例の樣姿に立ちもどりて

ちつとお待なさいなネ

ナアニ卒業しましたつて何んにもなりは爲ないわ幾ら卒業しないからつてあなたや白河さんほど出來たら其方が餘つ程いゝのよ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●寄書

○愛のうた

坦庵主人

1 世はうきものと。人はいへど。愛のかゞみに。うつし見ば
神のめぐみは。あめつちに。みちてたのしみ。あふれけり

2 野に咲く花も。くさむらに。すだく虫の音。ものみなは。
愛ある人をなぐさめて。なさけありげに。見ゆるなり

3 愛てふものゝ。なかりせば。世はわが獄。人はあだ。たか
ら尊崇も。いたづらに。平安をうばふ。具とならん

4 人の心は千々なれど。よきもあしきも。憐しや。いとほし
みつゝ。交らへば。愛にかたきは。なかりけり

5 よろづの物も。人の身も。つひに壊れど。とことばに。の
ちの世かけて。我が靈と。のこるは愛の。睦びなり

○亡母の忌日花月に斷腸の思あり

櫻田いう

散り行く花に名ごりを惜しみ片われ月に憐れを感ずるは總じて浮世の人情なり盛衰榮枯は花月にのみ止まるに非ず人世常に此の羈絆を脱する能はず生死喜憂の境界は何人と雖も經過せざるべからざるなり。

去夏の今日は余が斷機の友忽然浮世を辭せしの日なり余自後碌々此に一年を經過し今日往時。母のよく余を教へ余を導き余を戒め余を愛せし事を回想すればたとひ風景絶美の箱嶺に遊ぶも。愛友團欒して聖經を談ずも。清音耳を洗ふて精神を寒からしむるの音樂を聞くも。銀燭輝きて興將さに酣なる時も無形の心靈は此處に非ずして彼處にあり況んや其忌日に當り寂々たる樓上訪ふ人なく晩鐘烟に咽びて聲幽かなる時壁上一幅の肖像に對して坐せば心中無極の感慨なき能はざるなり在世の時余が憂慮あるを訴ふれば莞爾として笑を含み慰諭し賜ひしに今日は知らざるものゝ如し過失あるも叱聲なく。迷へるも教導し給ふの樣なし。濃厚なる接吻。深愛なる握手も得る能はず。余が名を呼び給ふ聲すら聞く事ならず思ふて此に至れば雙眼涙を以て滿ち兩袖を絞るの力なし。

我母は秋夜月前に余を携へて詩を教へ。春日花間に余を導て文を授く。實にこれ無上の快なり然れども今日の月は斷腸の媒なり。今日の花は胸中の悲歎を増すの器なり花は盛りに月は隈なきを愛づるとか云へど天然の風趣今何ぞ余が心を慰めんや況んや散る花を見缺け行く月を詠むるに於てをや。

天王寺白石の墓標黄昏これを見れば故人の余を俟つ者の如く墓前の花頭を垂れて思ふ所あるが如し。叢中に啼く虫は何人を吊ふぞ。晴空の半月誰れの爲めに照らす。滿目の萬物悉く悲哀の姿あり。嗚呼世に我れを慰むるに物なきか見る所聞く所に求むるも得べからず。然れども一物の余をして慰め勵ますものあり何ぞ則ち基督の愛なり神の恩惠なり余は未來に望みある處の者なり余は優美なる羔の群れに入るを得清き牧場に養はるゝものなり。浮世の花は散り易きも樂園の花は永遠に笑ひ浮世の月は曇り易きも眞心の明月は常に皎々たり何おか悲しみ何おか嘆かん思ふて此に到れば悲哀斷腸の念忽ち散じ。夢幻の浮世に鬱憂の淵に陷るの愚を感ず。これ余が至寳の寶なり余もし今日此の思ひなくば必ず沈鬱。憂苦の爲めに死せん。落花慘憺心を打つも。半月光り滿ふして思ひ爲めに沈むも。唯此の一物あるによりて輔けを受くるのみ。縷々書き終て筆を擱すれば東台の鐘聲遥かに三更を報ず。

●文苑

鈴木弘恭大人　撰

山家卯花

山さとのさきみたれたる卯の花に衣ほしたるむかしをそ思ふ　櫻井賚子

水雞

夜もすがらまきの板戸になにとをつぐとて叩く水雞なるらん　古宇田淑子

池蓮

麻衣のかろきたもとを吹風にすゞしくかをるいけのはちす葉　高鹽延子

樹陰蟬

夕つく日かたふく森の木かくれにしくるゝ蟬の聲ぞすゞしき　同人

鵜河

吉野川うふねのかゞり火さすがにも水かげ涼し夜やふけぬらむ　鈴木安子

窓螢　古宇田淑子

文机をてらすひかりもはづかしなむかしおぼゆる螢火のかげ

遠夕立　土居　峯子

ひとしきりけふも夕立ふるならん遠き高ねにくもさわくなり

夏祓　河村　松子

みそぎ川はらへの幣の追かぜに夏もながれてとまらざるらん

新秋露　土居　峯子

自から秋はきにけり萩か枝にはなかと見へておけるしらつゆ

蘭　立花　敏子

さゝかにのいとのとぢめやほころびしやれてにほへるこの蘭

蘭薫風　土居　光子

しら露は結べとかせにひもときてほころび匂ふふぢはかま哉

田家月　同　人

山田もる賤かたもとはつゆのみか月にもいかにぬれ増るらむ

をりにふれたる詞　間宮八十子

さほひめの霞のうでは天つ日の光をおほひのどかなる空を吹く風はこずゑの花のかをりをさそひ鳥の聲は雲の内にきこえ水のみどりは柳の糸を洗ふとりあつめたるけしきに世の物思ひも忘れて實に命ものばへつべしされバ心の駒の行かたを知らずしてそこはかとなくたどるにいと淸らなる水のながれありみぞはの花のうつろふさまは八重たつ雲とかうたがへる松こそといひけんは此所なるべし門には馬車たてつらねけすども多く出入るめりゆかしさに垣間見すれバ老たる人々なほし着たるかりぎぬ着たる打つどひて机の上なる歌どもを取重ねて講ずるほどにぞ有けるひそかに聞けバ家忠の大納言のこのなりどころにてけふしも尙齒會したまふなりけり殿の造りざまよりはじめ屏風疊硯の箱などめでたしと云はよの常なりつどひ給へる人々は爲康の朝臣成俊の朝臣教光の朝臣をはじめ七人ばかりにや有らんなほ垣下の人々多かめりいづれも愛たくぞおぼゆる講じたまひし歌のいうなるは又類ひやはある大みき參りかたみにくみかはし給ふさまもなべての人には異なり空のけしき花のにほひをだに死なぬ藥とおもひしをかくおもふことなくこゝらの年を経てかく珍らしき遊をさへしたまり人も有けりとかつは驚かれて猶見はてむとおもふほどにあるじの君高砂の尾上に立る白玉椿とうたひ給へる聲におどろけむこは我が肱をまげ庵の丸窓の夢になんありける。

○眞人渡邊鼎研學の爲め亞米利加へわたれるをよめる　渡邊　幸子

君のため。國のためとて。春かすみ。朝日に匂ふ。梅かねに。うくひすも鳴く。ころしもや。やまとこゝろに。浦やすの。秋津島根を。こぎいたす。船の帆影を見おくれは。煙りはそらに。立のぼり。はやとふくみ。あた波の。おもひするかの。ふしの根の。けふりも見へて。いとゆふの。いと靜かなる。雲水の。たゝ一づらに。大洋を。一葉うかめる。ささらきの。末のみそらの。うらゝかに。萬里の浪路。つゝかなく。境もかはる。やま人の。蓬かしまも。かくやらむ。目を驚かす。あめりかの。みなとにこそは。つきにきと。云おこせたる。電報便。またゝくうちに。こゝろ根を。たかひにしらす。千よろつの。こと國人も。はらからと。交りむすひ。ひらけ行き。洲のかよひも。ことつても。雁の羽からぬ。君か御代かな。

こと國の手振もあわれまなひつゝみかきてましよ日本たましひ

●新報

○東京女學　芝櫻田兼房町の同學は開校以來日尙淺きも內外諸教員の熱心と生徒の勉强とに依り日增に盛大に赴く由にて今度校舍を增築し內外諸教員を增聘し一層生徒の教授法を充分ならしめ從來教員の外柿沼光子、眞名綾子、三須利子、石橋安子、山田薫子、伊藤靜子、ミセスイビー、ミスサレー、ミセスヲルツ、竹中成憲、新井旭等の人々が同學教授講義を擔當すると云ふ

○女子學校と幼稚園　府下の有志者は靑山百人町の地所數百坪を買入れ英吉利學校と云ふを設けんとて已に經費二千圓にて工事に着手せし由なるか同校にては女子學校及び幼稚園をも附屬せしむる計畫なりと聞く

○女範學校　今度有志の人々にて麴町區下二番町三十八番地に女範學校なるものを設け辻新次、川田剛兩氏の賛成を乞ひ英國女教師二名を聘し英語を主として家政の教育をも授け英國の諸式家具陳列及び諸品の製作法幷びに饗應の事に至る迄親切に教授を爲すよし

○西洋裁縫　西洋裁縫の必要なる事を感し此度石橋福太郎氏の發起にて神田今川小路壹町目壹番地に女子裁縫所を設けて專ら良家の子女を撰み丁寧に教授する由又寄宿舍を設けて地方生徒の便を計るといふ

○通俗婦人講談會　今度女子教育に熱心なる諸氏の發起にて同會の第一回を去る

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

廿一日午後三時より麴町區元園町麴町小學校に於て開會し西洋の奏樂もありしが出席員及び演題ハ開會の主意(石橋助三郎)女子の獨立心(貫名綾子)妻君に望む(守川政二郎)婦人自から重んぜよ(木村貞子)日本の婦人(鍋橋國太郎)等の諸氏にて傍聽者ハ婦人に限りしと

○仙臺通信　宮城婦人矯風會ハ本年四月開會せし東北婦人大親睦會に胚胎し去七月史に在仙臺の婦人達が相談會を開き此程愈々萬事整頓したれバとて押川つね姉を會頭に人見ぎん姉を副會頭に又仙臺にある四教會より各一名ヅヽの書記を撰び之を議員とせり又同會の重なる規約は基督教主義の道徳に基き社會の弊風を矯正し婦人の品位を進むること會員ハ右の主旨を體し上帝の輔助を仰ぎ左の數項を確守すべし一、飲酒喫煙を禁すること二、萬事期程を立て無益に時間を費さゞること三、飲食衣服器具等ハ實用を專とし奢侈に流るべからず、四、凡て猥褻の傾向ある遊技を避くること、五、禮儀を重じ家政を整へ子女の教育に心を用ふること等なり此會ハ萬事婦人の計畫に出でたるものにていと雄々しきことにこそ(本月廿四日基督教新聞)

○横濱山手百七拾八番フェリス女學校　にては昨春校長ブース氏校務を擴張せん爲め一時歸國せられ資金募集中なりしが氏の盡力にて寄附金も充分の高に上りしとて去る七月上旬別に一名の女教師と共に來航せられしが今般愈校舍を新築し本邦教師を増聘し規則にも一大改革を加へらるゝ由聞く所に依れば右新築の校舍は四層の構造にて講堂寄宿舍は勿論體操場まで其中に具備し竣工は本年中の見込にて落成の上は更に百餘名の生徒を募らるゝと云ふ又此後同校には高根虎松君校務に從事さるゝよしに聞く

○英和女學校　神戸諏訪山麓なる英和女學校にて今度構内へ豫備校一棟を新築する都合にて其準備に着手し成功の上は十歳以下の兒女をも教授すると

○滋賀縣の女學校　滋賀縣にて女學校設立の計畫ある由は兼て本誌にも記載せしが右に付同校の位置を大津に定められなば同地舩頭町舊弘道學校の建物と金千圓を大津市街及び接近の村々より寄附し尙又女學校と共に幼稚園をも設立するとゝなりなば更に千五百圓を寄附すべしと決したる由

○中後閑村婦人會　群馬縣中後閑村婦人會は去る十五日上原戸長の宅に開きしが安中驛よりも黒川常子、星野直子、杉山某其他數十名出席し席上演說又は唱歌等あり中々盛會なりしと會員なる某子よりの報知

○埼玉婦人會　同會は去月十五日浦和に於て總會を開き規則を議定し名稱を婦人協和會と改め役員を撰擧せしに會頭は吉田知事の夫人副會頭は田野警部長の夫人其他幹事等も夫々當撰せしが爾來諸事の大いに整ひ又會員も餘程増加せしよし

○談話會　新潟女學校の創立員及び新潟區内の基督教信者には去る十五日午前九時より同港に滯在せし三好司法次官を新潟女學校内へ請待して談話會を開かれ同次官にも一場の演說をなしたりと云ふ

○婦人風俗矯正會　高知師範學校女子部卒業の生徒には今度婦人風俗矯正會なるものを設置せんと目下其周旋中なりと云ふ

●海外女事

○女新聞記者　ニウヲーリアンスのピカユン雜誌は此頃ろ其五十年期の祝會を催したるが其時會を主とりたるはエリザニコルソン夫人なりき同夫人は嘗てある每日新聞の持主兼編輯長として米國南部に於て最初の女記者となりたる人なり扨て同夫人が此のピカエン雜誌に從事したる頃は四方より色々と攻擊するものあり女は斯る業務を執るべきものにあらずと種々駁擊したるが今日となりては右ニウヲーリアンスの如何なる新聞社にても一社に四五人の女子の關係せざる所なき有様となれり

○家政學士　タラ、ヘース夫人及びチルリエ、ラウソン孃はアイヲワの農學校より家政學士(M.D.H)の學位を得たり

○支那の女醫博士　メーキング女史は數年間米國に留學し一昨年五月紐育病院の醫科大學を卒業し爾來ヒラデルヒヤ、ワシントン、ニウヨーク等にて種々醫術を研究し後紐育病院附の醫師となり幾干ならずして紐育より程遠からぬモンヴアーモンスの小兒養育院の醫師なり至る處絶群の伎倆を顯はし名聲最も高かりしに今度華盛頓顯微鏡協會の名譽會員に撰ばれたり元來同女史は支那寧波なる米國プレスビテリアン協會の醫士にして兼て東京大學の教授たりしドクトル、ピー、マクカーフー氏の親戚米氏の養女にて同氏及び同夫人が數年前に右キング女史を携へ共々に米國へ歸りて教育を受けしめたるなりと

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

特別廣告

東京婦人矯風會々員姓名宿所表（第三回）

本鄕區の部（前號に續く）

宿所		姓名
駒込東片町二十一番地		青木すみ
森川町一番地		中村てう
湯島三組町八十六番地		石崎つる
東片町二十二番地青木方		古市靜
帝國大學校內五番		登川靜生
駒込西片町十番地		木村花
帝國大學校內		寺尾愛

神田區の部

宿所		姓名
今川小路一丁目一番地		服部千代
西小川町一丁目六番地		次城たい
今川小路一丁目一番地		竹內たけ
同		丸山なほ
○		草野ひさ
駿河臺小松宮邸內		鬼頭ます
表猿樂町三番地		藤島のぶ
北神保町十七番地中山方		玉生れつ
紺屋町十一番地		福原ふく
猿樂町六番地	特	原田てる
紺屋町十一番地	同	幅原祐四郎
猿樂町十七番地速水方	同	高橋貞碩

下谷區の部

宿所		姓名
下谷龍泉寺町四十二番地		平田しま
同練塀町五十一番地		宮益みつ
西黑門町二十二番地		荻野吟
上野花園町七番地		岩松あいた

日本橋區の部

宿所		姓名
日本橋釘店八番地		佐々城豐壽
藥研堀町三十番地		三浦りう
濱町二丁目		切替みな
同町二丁目十二番地		清水又市方りか
本船町十六番地		本田こう
同町十八番地		島ひで
本石町一丁目二十六番地		竹內とく
同町一丁目十一番地		北原はる

廣告

女學雜誌大賣捌擴張廣告

弊堂儀今般本社ト特約ヲ結ヒ大勉强ニテ賣捌仕候間何卒倍舊續々御愛讀之程伏テ奉希上候也

信州北佐久郡小諸町
發蒙舍書舖

特別大賣捌 相場七左衞門

○鈴木弘恭君講述○山村亮作君筆記

つれ〴〵草講義

定價十二錢 郵税四錢 第一號

右は鈴木弘恭君の講義ありたるを山村君の筆記せられたるものにして其解釋の綿密なる一本を机上に備ふる時は五里の霧中を出でゝ霽晴朗々たるの天色を見る心地す四方の貴嬢諸子請ふ續て講讀あらん事を

東京新橋日吉町八番地
女學雜誌社

同志社女學校高等普通豫備幷ニ別科生徒募集廣告

本校ハ從前ノ學科ヲ改正シテ高等普通及ヒ豫備ノ三科ト爲シ一層課程ヲ高尙ニシ有益ナル女子ヲ養成スル所トス且ツ米國ヨリ女教師ノ來着アレハ更ニ別科トシテ割烹、裁縫、編物、音樂、會話科等ヲ置キ便宜ニ從テ專修セシム共ニ來ル九月十九日ヲ以テ開業シ入學試撿ハ十五日ヨリ執行ス志願ノ淑女諸氏ハ九月十五日迄ニ申越シ有之度規則書ハ郵劵二錢御送附アラハ早速遞送可仕候

西京同志社女學校

小供のはな誌

毎土曜日發兌 壹冊壹錢五厘

本日第貳號發兌●些細の事に注意すべき話●傲慢なる虎の話●不攝生なる蜂の話●大黑天の話●諸大家の祝辭●ふしぎな草木（櫻田ゆう君）其他數件○二十冊前金二十七錢五十冊前金六十錢外に壹冊に付郵税一錢

東京芝區南佐久間町二丁目壹番地
幼談社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

女生徒募集廣告

本會ハ女子ヲシテ日常欠クヘカラサルノ業事ヲ授クルノ目的ヲ以テ西洋女教師並ニ各科良教師ヲ聘シ英語學西洋服裁縫編物縫取其他凡テ婦女子ニ必用ナル課程ヲ無束脩ニテ教授ス滿十二年以上ニシテ入會望ノ者ハ至急申込アレ但シ規則書望ノ者ハ郵券二錢ヲ投セバ送呈ス

築地三丁目十二番地　**女子講習會**

毎月二回 **貴女の友** 一部金八錢　十部前金七十五錢　郵税一部一錢　九月五日初號發刊

凡そ婦人たるものは一たびは必らず人の妻となり次には人の母となり又一家の主婦とならざるべからず是自然に具る女の役目たるが故なり。之を女の本分といひ能く此の本分を盡すものを貴女といふ。本誌は即ち貴女たる方々の朝に夕にともなひ給ふべき友達にとて發行するものなり。其中に書き列ねたる事項をば貴女の友といふを始めとして家政、保育法、學藝、雜談、論説、新報の七欄に分ちて妻女、母親、主婦等の心得給ふべき家事經濟法、兒女保育法、衞生法、婦人禮法、文學美術及ひ通俗理學等の事項を解し易く簡短に説明し且は婦人世界に利益ある大家の論説を書き集め又其の快樂ともなり摸範ともなるべき最面白き寓意を含みたる小説に美わしき挿畫をも加へて記載せたり。されば此等の事項をだに落なく心得給はんには適文明の世の貴女として愉快に此の廣き世界を往來して其生涯を送り尚且子々孫々の榮華をも遂させ賜はんこと疑ひあるべからず。世の學問に心を寄せ給ふ貴孃は更なり一家を經營め兒女養育の役目を負ひ給ふ貴夫人方はかならず邊近く置かせて須臾も離させ給ふまじき雜誌なり。

貴女の友
教育報知
教師の友

發行所 東京日本橋區本町二丁目一番地 **東京教育社**

西洋和服裁縫編物等を教授す

通學並寄宿入舍を乞ふ者は速に申込まれ

八月

神田今川小路壹丁目壹番地 **女子裁縫所**

發兌					
八月。	六日	十三日	二十日	廿七日	
九月。	三日	十日	十七日	廿四日	
十月。	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日
十一月。	五日	十二日	十九日	廿六日	

定價		
一册。五錢	郵税。一錢	（但府內無郵税）
十册。四十八錢	郵税。十錢	（同前）
半年分	一圓十七錢	府外は 一圓四十三錢
一年分	二圓卅四錢	府外は 二圓八十六錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を揭する場合に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分每に十部增の割合と定む

一行 一回 前金拾錢（廿七字詰）
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 5 *sen*. By post *yen* 1.43 six months, *yen* 2.86 per annum, in advance.

Edited and published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, SHINBASHI, Tōkyō, Japan.

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町巖々堂○東京芝西久保櫻川町萬春堂○東京神田區雉子町幽々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新殼町頁明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○東京本郷四丁目文壽堂○橫濱住吉町角田屋貞○京都四條通小橋へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンポード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版舍○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彥根西內大工町新々堂○相州小田原綠町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○勢州松坂家里初枝

發行所

本局 東京京橋區日吉町八番地 **女學雜誌社**

持主兼編輯 巖本善治

印刷 森田豐